

下化衆生遍 哲学の実践

人が日人または靈人である実相を自覚することを悟りという。人は諸生から生長して次第に靈人である自覚に入るののである。モノといえども、ことごとく生きているのである。無機物といえども生きており、その分子を構成する電子は常に陽子を中心として旋回運動をなしている。彼は単にみずから動くだけではなく、相手を識別して相手の和類にしたがって別々の行動をとる。すなわち相反発したり、相親和したりするのである。しかし、無機物は諸生であって、靈人ではない。諸生と靈人とはどう異なるかという点、諸生は分一であり、靈人は全一であることである。人でありながら諸生である人が多いことはまことに嘆かわしいことである。

分一とは個々別々の一個休としての自覚であり、全一とは個々別々に別れながらも、それが全休として一つであるという自覚である。

人はその自覚が向上するにしたがって、諸生である自覚から靈人である自覚に入る。

第四章 实在・理念・国家・人間

四

かように、われわれのうちには神というものが一様に宿っ

ている。それが理想となり規範となり良心となつてわれわれを褒めたり貶したりしているのであります。神は、全然自分とかけ離れてどこか遠い所にいるのだと思えばまちがいであって、木当は自分の中にあるのです。さればこそ、「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」というような古諺も自然に出てくるのです。「道」すなわち宇宙に満ちている道（真理）を聴きて、自覚し、悟つて、自分の内にあるところの道（理念）と一つになった時には永遠の「大生命」と、自分に宿っている「生命」とが全一して生きることになるのですから、現象の生命は「夕に死すとも可なり」であつて、そういう現象世界の生命はあつてもなくても、どうでもいい、それに積極的関心をもたなくなるのです。要するに、自分の生命は、もう永遠に生き通しであり、自分のうちに宿っているいのちが、永遠の本体と一つになっているのですから、現象の肉体の生死などは問題でなくなるのであります。『生命の吉相』を読んで悟れば病気が治るといふのは副産物であつて、道に一致し、「死んでもよい」といふほどの心境になつたとき、「道」そのものに病気はないから病気が消えるのです。

そういうふうにするすべての人間のうちに宿っているところの理念——無限に完全なる相が本當の神であつて、そこから流れ出る万人俱有の理想、規範、標準によつて、人間に宿る神なるものは、自分一個人にのみ宿っているのではなしに、すべての人間に一樣に宿っていることが知れるのです。すべての人間に一樣に宿っているとすればそれは宇宙に満ちているわけです。その宇宙に満つる神がいわゆる眞実本源の神であります。その神のいのちがすべての人間のうちに実相として

宿っていてその実相によりいっそう近づかしめるための標識として理想が現われてくる。その理想によりよく近づいた場合に喜びを感じるのであります。そして、その逆に近づかなかったならばなんとなく「気の咎め」を感じる。だから神罰は外からは来ない。決して罰を当てる神が外界にあるのではない。神はわが内にあるのでその規範によってわれわれを賞めたり、気が咎めたりしているのです。かくのごとくわれわれの内部に宿っている理念としての最高、完全なるものが神です。それこそ本当の、真実不慮の自分なのです。したがってその本当の自分というものを完全に生きたら、今現象界にあるところの肉体の生死は問題でなくなる。ここに「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」の自覚が出てくるのです。「病気を治してくれ」と言われるのは「死にたくない」人、すなわち本当の自分——天地の道と一つである自分—を悟っていない人です。そういう人にわたしは「本当の自分を悟れば病気は治る」という。「病気が治りたいという心を捨てて道を生きようという頁実の心を起こせ」とわたしは言う。実際はそうして『生命の真相』を読んで道を生きようという頁実の心を起こした人の病気はたいがい治っているのです。

生命の真相 日本教分社 谷口雅春